
ロボットコレクションSS（練習）

藤村文幹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロボットコレクションSS（練習）

【Nコード】

N9612W

【作者名】

藤村文幹

【あらすじ】

「一日一ロボット作るよ。」という個人ブログで製作したロボットの設定を使って書いたSSです。

10月2日 ロボットコレクションSS（本番）「を始めるので完結扱いとします

もしかしたら時々こちらにも更新するかも知れません。

アイアンロード（前書き）

とても短いです。

原則、「一日一ロボ作るよ。」で製作した設定のロボが動いている
雰囲気伝えるだけの物です。

アイアンロード

『警告する。投降しない場合はこのまま砦を破壊する――！』

渓谷に築かれた城塞に、人型のものが掌を向けている。人、ではない。巨大だが巨人でも無い。

機械の軋む音。遠くからでもはっきりと分かる魔法陣が放つ冷たい光。前に付きだした腕の内側では、光る刻印のされた魔導輪が唸りを上げてゆっくりと回転している。

スタップギア。人型機械式魔法杖。最新式の、科学を持って魔法を増幅する最先端の魔法の杖だ。その魔法増幅効果は機械式魔法杖と同等。防御効果は数段上。

『繰り返し。投降しない場合はこのまま砦を破壊する――！』

若い男の声だ。スタップギアを操る魔導師の声か。

砦は沈黙を続ける。城壁の上から兵士達が下を覗き、震えながらスタップギアの所作を見つめている。恐れているのだ。

一兵士にとって、単機で兵士100とも言われるマジックギアは恐怖の対象でしかない。戦場を破壊する悪魔なのだ。兵士達が血を流し、屍を晒すというのに、スタップギアの魔導師は悠々と歩いて兵士達を蹂躪する。

砦は沈黙を続ける。

光を放つスタップギアの腕が次第に輝きを増す。つられて唸りも大きくなる。

スタップギアを見つめる兵士が眩しさを目を閉じた頃、光がかき消えた。輝く光が風のような速さで砦の壁にぶつかって、岩が高いところから落ちて割れるような音と共に消えた。

光がぶつつかった壁は、ない。積み重ねられた石が、内側に吹き飛んで粉々になったのだ。

『今のは警告だ。このまま返答が無い場合、砦と配置された兵達の無事は保証しかねる』

脅しだ。この上なく、現実に近い。

数刻後、この砦は陥落した。

アイアンロードと呼ばれるスタッフギア単機によって、陥落したのだ。

アイアンロード（後書き）

このSSはこちらのページに設定が載っています

http://blog.livedoor.jp/tohka
1day1chara/archives/3624801.ht
ml

ディザスターマン

夜の街をディザスターマンが駆ける。駆け行き先には噴煙を上げ炎の舌が覗く高層ビル。

人型トラックの技術を流用して作られた人型緊急救助車両ディザスターマン——その活躍の場は限られている。

『トニー、ちゃんと付いて来てる？』

通信。過酷な現場に行く前の軽口だ。

『後見ればいいだろー？ ちゃんと付いてるよお』

『後なんか見てらんないよ』

現場のビルの直下に到着。しかし休んでいる暇はない。

『外壁は、ガラス張りか。吸盤が使えるね。じゃ、いくよ』

腰の辺りに両腕を持っていくと、オペレーターの簡単な操作でディザスターマンの両腕に登攀用吸盤が設置される。オペレーターは吸盤を確認すると、ディザスターマンを大きくジャンプさせた。

片腕を振り上げ、ガラスの壁面に吸盤が吸い付くようにそっと下ろす。吸盤は与えられた性能を満たすために強固な吸着力をもってガラスに張り付いた。オペレーターはこれだけでは満足しない。空いた片手を張り付いた吸盤の位置よりうでに持っていく、貼り付ける。次は吸盤内に空気を入れ、吸盤を剥がし、片手より高い位置に張り付く。

繰り返す。

繰り返す。

地味な作業ではあるが、消防車も救助ヘリもまだ到着していない。ディザスターマンはどんな緊急車両よりも先に、いの一番に現場に到着する。時には二足で道では無いところ走り、時には四輪になって車道を走る。誰よりも早く、速やかに。

繰り返し繰り返し目標の高さに付くと、腰にマウントしてあったガラス削りを手にとって壁をガリガリと削る。高いのでガラスを

落下させてはいけないのだ。

必要な分だけ丸を描くように削ると、ガラス面を叩いて内側にガラス片を落とすように穴を開けた。

オペレーターはガラスに空いた穴にディザスターマンの前方に空いたワゴン入り口を据える。

「助けに来たよ！ けが人病人子供優先で5人まで！ つぎが来るから押さないでゆつくりとね！」

拡声器によるアナウンス。

ディザスターマンのワゴンは救急車ほど広くない。ディザスターマンは消防車ほどの消火能力はない。けれど、どんな緊急車両より速く、迅速に、現場に到着する。

ディザスターマン（後書き）

今回のロボットは以下のURLにて設定を見ることができます。

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1day1chara/archives/3653888.ht  
ml
```

鉄の兵士が砂漠を駆ける。

ジグザグ走りを基本とし、大まかに弧を描くように戦車に接近。飛び上がり戦車の頭上から撤甲弾をバラ撒く。

人型戦車——その名の通り、戦車を人型にしたものだ。関節式駆動により戦車に真似できない三次元機動をし、歩兵より多くの火力を持ち、ヘリに出来ない素早い回避運動を行う兵器。徹底的な自動化簡易化により一人でも操縦出来るこの兵器は、実に大量に作られ、屋外では歩兵と戦車の代替となった。

戦車を蜂の巣にし、内部の人員を殺戮したHT - 12は戦車の背後に着地する。背中ポッドから吸着地雷を射出して戦車にくっつけるとそのまま次の獲物を狩りに走る。

止まれば戦車に狙い撃ちされ、戦車砲の一撃でHT - 12は撃墜されてしまう。当たり所が良くても腕の一本は無くなる。脚に当たればなぶり殺しだ。ロケットランチャー持った歩兵に囲まれても同じ運命。常に動かなければ、撃たれて死ぬ。

時に撃ち、時に跳躍し、戦場を無尽に駆け抜ける。

ガッ『アルファ1、待ってください！』

ガッ『走れアルファ4！死ぬぞ！？』

通信。通信の向こうからアルファ4の悲鳴が聞こえて、通信が途絶える。後方で爆発が起き、通信で送られてくるマップデータからマークが消える。昨日、ちょっとしたゲームに勝って喜んでいた新人だった。

人型戦車は機動力と攻撃力を駆使すれば地上最強だ。それだけに扱いは難しいし、敵も優先して狙う。止まっではいけない。

僚機がもう1機、爆散した。

アルファ1、サムは戦場を駆け、戦車を狩った。1機ずつ脱落していく僚機たちと共に、戦車を落とし、歩兵をなぎ払う。

敵はまだ温存している。敵の人型戦車はどこだ。サムは周囲に目を向けながらも止まらない。

走って走って走り続けて、いつかこの戦争が終わるまで走り続けるだろう。

止まれば死ぬ。

HT-12（後書き）

今回のロボットは以下のURLから設定を見られます。

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1daycharacter/archives/3479429.ht  
ml
```

ガン・ボーズ（前書き）

ゾンビ注意。

ガン・ボーズ

東京の街を死体が歩く。虚ろな目や冷えた体から死体であるのは明白で、本来動くはずがない者だ。

死体が一つ。それは20mを越える体躯を緩慢に動く。一步、また一步あるく度に汁がぼたりとしたたり、腐臭をまき散らす。

窓が割れた病院から5歩。それだけ歩いたところで、周囲のスピーカーが一斉に音を鳴らす。

なああああああむううあああみいだあぶううううつつ、うつつうううううううう…。

お経だ。坊主100人が集まって録音したものを流しているに過ぎないが、確かに経は経である。

病院から200m離れた消防署にある倉庫の屋根が開いた。単調な電子合成の警告音が響く。消防署の前に陣取った市民団体がたださえ騒がしい声を一層荒げた。手に持った横断幕には「国による死者の冒涇を許すな!」とか「税金を無駄に使うガン・ボーズ反対!」だとか書いてある。プラカードや旗、Tシャツなんかも文字が書いてあるが、内容は似たようなことだ。

倉庫から巨大な坊主が立ち上がる。袈裟を着た、機械の坊主だ。

禿頭がつるりと太陽光を反射する。

坊主は両手の甲に付けたチェーンソーをぎゅいんぎゅいんと回し、全身の穴から炎を一瞬だけ噴いた。

『えー動作チェック。天気輪及び茶毘炎噴射機共に正常。周囲に警告。ガン・ボーズが出動します』

ガン・ボーズの備え付けのスピーカーから搭乗僧侶は動作が正常であることと、これから出動することを伝えた。これから始まるのは儀式なのだ。死者を安らかに送るための、儀式なのだ。

『今回の仏様は矢須伸介、86才の男性。ゾンビ熱により5分前に死亡。希望は浄土真宗式。巨大化し街を徘徊中……それでは始めさせていただきます』

葬式ではない。まして通夜でもない。現代において追加された新しい儀式。生ける死者となってしまう者を安らかに送るための、葬儀に先駆けて茶毘に伏す無力化式。

『いざ、南無阿弥陀仏ッ！』

ガン・ボーズ（後書き）

ガン・ボーズの設定は以下のURLにて公開しています。

http://blog.livedoor.jp/tohka
1day1chara/archives/4956181.ht
ml

ギャラクシーエクスプレッシャー

銀河に敷かれたレールの上を汽車がゆく。それは銀河を旅する銀河鉄道。

その食堂車。

「宮沢先生、次はどこでしたっけ？」

乗客のケンジ少年がテーブルの向かい側に座る、黒いコートを着た青年に聞く。少年が宮沢青年と呼ぶ青年は湯飲みに注がれた熱い茶を啜った。

「確か、金牛宮駅でしたね。野菜が名産で、タウロスタマネギを使った牛丼は絶品だとか」

「牛丼！？ 楽しみだなあ」

「ケンジ君、お仕事が終わってからですよ」

談笑する二人。窓越しにはグスコープが併走しているのが見える。「あ、さっき郵便を見たんですけど、金牛宮のサインモンスターは牛型じゃないみたいですね、先生」

と、前方から爆発音。

ケンジ少年と宮沢先生は車窓から身を乗り出し前の方を見る。金牛宮駅の駅ビルが巨大な金色の巨人に攻撃されていた。

「これはいけません。ケンジ君」

「はい！ 先生！」

二人は先頭の機関車に急いだ。

先頭の機関車が後続車両を切り離し、レールの上を走り続ける。いくつかの箇所に分岐目が入り、そこから分割され、位置が変わっていく。

「エクスプレッシャー！」

人型になると、中から操る宮沢先生が叫んだ。

そう。これこそがダークマターによってサインモンスターへと変

質してしまった守護星神を元に戻すために作られた銀河鉄道勇者エクスプレッシャー！

「ケンジ君！ 準備はいいですか？」

「いつでもいいですよ先生！」

「では、お願いします」

『はい！ ギャラクシーステム、ドライブ！』

宮沢先生の要請に戦闘指揮車両のケンジ君は答え、拳でコントロールパネルの赤くて目立つボタンを叩いた。プラスチック製カバーが割れる。

「エクスプレッシャー、ギャラクシーフュージョン！」

金牛宮の駅から鶯色の鳥―スターヨダカが飛び立つ。併走していたグスコープドリが立ち上がり、二つに割れる。貨物車両からセロ―ゴーシュが射出された。それらはエクスプレッシャーの周りを変わると、あるべき姿へと変形していく。

「雨にも負けず、風にも負けない！」

そして変形したグスコープ、スターヨダカ、セロ―ゴーシュがエクスプレッシャーにドッキングし、エクスプレッシャーは真の姿を現した。

「そういう者に、私はなった！ ギャラクシィィィエクスプレッシャー！」

そう。物語は力を与える。

胸に輝く太陽のマーク。翼は夜鷹のように大きく、脚は燃える火山のように黒く、両腕はセロのように繊細ながらも力強く、そして銀河鉄道のように気高く強い、ギャラクシーエクスプレッシャーだ。
「さあ、サインモンスターよ、元の守護星神に戻っておくれ」

ギャラクシーエクスプレッシャー（後書き）

ギャラクシーエクスプレッシャーの設定は以下のURLのロボットから少し修正を加えました。

```
http://blog.livedoor.jp/tohka-  
1day1chara/archives/4880727.ht  
ml
```

元々ギャラクシーケンジオンでしたが、名前が余りにも酷いので改造。

CIHWS - 001 フランクス

宇宙戦争と聞いて、宇宙戦艦同士が超遠距離から撃ち合っているのを想像した奴。君はきつとこの世界の宇宙戦争にはついて行けないだろう。

艦隊の近くにワープアウトして湧いて出る機動兵器を機動兵器が迎え撃つ。撃つのに時間が掛かる戦艦の主砲はこの戦いでは役立たず。縦横自由に動く機動兵器に悠長に照準を合わせてたら先に砲塔がやられる。そういう戦いだ。

人型兵器フランクス達は陣形を組んでワープアウトしてくる敵を撃つ。陣形から外れて敵の攻撃に当たる機体もいる。戦艦に当たりそうなミサイルに銃撃を与えて迎撃もする。

『まだまだ来るぞー！ オマエラ気合いれろー！』

女性の声がフランクスのオペレーター達に届く。激励に気を良くしたオペレーターは我先に戦功を得るために敵に突撃する。時には陣を組んで、時には単機で突出して。

エリーの操るフランクスは僚機が全ていなくなってしまった。それどころか周囲に味方機がない。母艦の直近にも関わらず、一種の空白になっていた。

『うわまずい』

エリーが周囲を見渡すと、突撃してくる敵が2機。絶対に通してはいけない。

エリーは銃撃で片方を狙って攻撃する。アサルトライフルの弾はまばらにあたるが攻撃力が足りない。全部撃ち尽くしてやっと片方を爆散させた。爆炎からもう1機の敵が姿を現すと、エリーのフランクスに向けて銃撃を与えてくる。ビーム、それも戦艦に当たるコースだ。

エリーは一瞬の判断で片足を切り離し、敵の放ったビームに当てる。片足は派手に爆発する。

切り離れた脚が爆発するより先にエリーはブースターを噴射させて前へ突進する。直線的な動きで母艦に突撃を掛ける敵の進むコースに機体を近づけ、もう片足を切り離して置いた。

エリーが片足を置いて離脱した直後、突っ込んできた敵を巻き込んで脚に仕込んであった爆弾が爆発する。

『よし、なんとか。コマンダー！一旦帰還します。艦左側面に味方機がない空白があるからさっさと次発進させて。あと武器が無くなったから一度着艦させる』

エリーは言いたいことだけを一方的に言い散らしてからバーニアを調節して母艦の着艦口に向ける。

艦に入る直前、流れ弾でエリーのアランクスは撃墜された。

「あー！ また着艦直前にやられたー！」

艦内部のオペレータールームでエリーは自分の頭をかきむしって叫んだ。横の同僚が「またあ？」とあきれ顔だ。

『ちよつとエリー。着艦直前は注意してって何回も言ってるじゃない』

コマンダーからの通信。わかってるよと答えつつエリーは格納庫を呼び出した。

「おいメカニック。次のアランクス用意出来てる？」

『5分待って。今さっきキミの要請で用意してあったのが全部出たんだ』

「えー」

アランクスは記録にしか残っていない大昔に使われていたCISという武器、その代替だった。宇宙での艦隊戦が主流だった時代に消えて、また必要とされた。思考加速した人間の判断力を使うため、人が無線で操作する。壊れても次を出せばいい。そういうことだ。

「こちらエリー。ファランクスもつかい出るよ！」
『今度は壊さないでね。安くないんだから』
「分かってるって！」

CIHWS - 001 ファランクス（後書き）

ファランクスの設定は以下のURLで公開されています。

http://blog.livedoor.jp/tohka
1daycharacter/archives/4264081.html

ピッケメルクーリオ

黒い人型が走る。片手に剣一本だけを携え、弾丸の嵐を避ける。右に左に上、ときには空中で軌道を変えて下、崖を蹴って斜め。

黒い、ピッケメルクーリオが走る先に大量の火器を乱射する白いロボット。両肩のチェインガン、両腕のマシンガン、腰両側の機銃、さらには背中に背負ったミサイルまで撃つが当てられない。六本もある脚をロクに動かさず、その場に立つて。

『あたれ、当たれよ！こんなに撃ってるんだぞ！』

ある種の恐慌か、ヒステリックな声を上げて白いロボットのパイロットが喚く。対するピッケメルクーリオは無言。一切発言をせずに敵の独壇場であったはずの距離から大地を走る。

ピッケメルクーリオは敵の手前100mから大きく跳躍する。バーニアを全力噴射し、前へのベクトルを大きくする。

跳ぶ黒い影を追うように白いロボットは撃ち続けるが、照準よりもピッケメルクーリオは速い。白いロボットの上空を飛び越し、すぐさま反転して着地。剣を地面に刺し両足を擦らせブレーキング。白いロボットの旋回が90度になったところで再び駆け出し、右側から剣を振り駆け抜ける。白いロボットの右肩と右腕の武器がまとめて両断され、爆発する。

『うわあ！』

勝負は決まった。トドメは消化試合だ。

「ふう」

とひや・けんすけ

飛矢剣介はボックスボットの筐体から出て伸びをした。

「やっぱこいつ使いやすいわ」

剣介が抱えているのはボックスボットの収納ボックス、ボットボックス。サイズが一番小さい小型だ。ボックスボット本体と武器が2、3個しか入らないが、彼のピッケメルクーリオには問題無い。初期

装備では実体剣が一本しか付属していないのだ。カスタムした後ならともかく、機体の慣らしのために初期装備で遊ぶ分には全く問題無い。

「しかし今の相手、弱かったな。全く動かないからの的を相手にしてみたいだった」

彼はまだボックスボットを始めたばかりの少年だった。最初はプロメテウスハーツという、遠距離砲撃戦を得意とする高級機を使っていたが、彼には合わずに使いこなせないでいた。

「きつと、保治と戦う時の参考には、ならんだろうなあ」

彼は友人である少年のピッケメルクーリオと自分のプロメテウスハーツを交換したのだ。初心者モデルだが、性能が尖っている。しかし剣介には、この上なく合っていた。

「よし、じゃあカスタムを試してみるか。機体名は、ソードメリクリウス。うんそうしよう。その方が俺のロボットって感じがする」

ボックスボット。最低ランクの機体でも一体五千円から。一プレイ200円、カスタムするなら機体と同程度の金を掛けるのが当たり前。

剣介のような中学生には、金の掛かる遊びである。

ピッケメルクーリオ（後書き）

ピッケメルクーリオの設定は以下のURLで公開中です。

http://blog.livedoor.jp/tokam
1daycharacter/archives/3643918.ht
ml

エーテルS2

「敵襲！？ 今時宇宙海賊だって？」

冗談じゃない、とトトは喚いた。AES免許を所持しているトトは宇宙図書館の艦長から戦うように要請されたのだ。

「俺は作業員として契約したんだぞ！ 戦うなんて無理だ！」

『だが事実としてAESを使えるのは君だけだ』

「宇宙服と一緒にだろあんなもん！ そもそもエーテルS2は作業用パッケージ。戦闘には耐えられないって」

艦長が頼むのも分かる。作業員とはいえ、戦う術はトトしか持っていない。内部での白兵戦ともなれば、AESを装備せずに行うのは無謀を通り越して莫迦のやることだ。

だがトトが言うように、ここにはエーテルS2という空間作業用パッケージしかない。武器は用意されているが、戦闘用とはそもそもの性能が違う。中でも機動力の差は歴然だ。

（中略）

「ホントにボーナス出してくれるんですよね？ 俺が死んだらウチのばーさんに渡してくれるんですよね？」

スーツの上からエーテルS2のパッケージ着け、ハードポイントに銃や斧などの武装を装備したトトは確認するように艦長に聞いた。
『保証するから！ 速く！』

「分かりました。行きますよ」

宇宙海賊といえど、今図書館を狙うのは食いつばぐれて盗賊まがいの事をしているごろつきだ。希少本や珍しいデータがあるとはいえ、図書館を狙う宇宙海賊が上等なものであるはずがない。ならば、一人でも十分に戦える。と自分に言い聞かせてトトは作業用気密口から空間に出る。

すぐ1000mの距離には古い型式のAESが群れを成して迫ってきていた。

「恨むなよ！ こっちだって死にたくないんだ」

気密口の影からビームガンをショットモードにし、撃って群れをまとめて攻撃する。AESは宇宙服の発展系であり、少しでも傷つければ勝手に脱落する。

エーテルS2は攻撃に耐えられるほど丈夫じゃない。防御を図書艦の船体にやって貰うのはトトの判断だ。

「連射モード、セット。こっちに、来るなよ！」

細かいビームの弾丸を撃ちまくる。これですしでも怯んでくれれば良いのだが。

エーテルS2（後書き）

エーテルS2の設定は以下のURLへ

http://blog.livedoor.jp/tohka
1day1chara/archives/3663160.ht
ml

イダテンX - 4

俺の名は下妻悟。人型トラック乗りだ。

人型トラック乗りは給料は高いが時間が掛からない仕事で、よく金食い虫と揶揄される。だが俺は誇りを持ってやっている。

ここ火星地下都市ネオアンダートーキョーでは街の高低差が激しすぎて、また高層建築が多すぎて普通のトラックでは配送しにくい。そこで皆様のお宅に荷物を届けるのは人型トラックの役割、ってわけさ。

人型トラックは扱いが難しい。だから免許取得も厳しいし、給料もいい。難点は運搬できる量がトラックより遥かに少ないって事かな。軽トラより少ない。

人型トラックには人型トラックにしか出来ないこともある。こんなふうに。

「ダウンフォースナウです！ お届けに参りました！」

元気のいい声に応え、マンションの玄関ドアを開けた。目の前に運送会社の人は、いない。マンションの通路にしがみついている人型トラックがいた。呼び鈴を鳴らしたのは長い腕を使って、マニピュレーターの手でちょこんと押したのだろう。

「安形啓介さんのお宅でよろしいでしょうか？」

操縦席には若い男。人型トラックの運転手にしては、若い。

安形啓介は運転手の問いに肯定すると、玄関の棚に常備してあるスタンプ印鑑を取る。

人型トラックは片腕を後の荷台に伸ばし、大きめのダンボール箱と掴んで安形啓介の目の前に持つてくる。

「ザマゾンさんから、ですね。ここにハンコかサインください」

マニピュレーターから枝分かれした指示棒がサイン欄を指した。

安形啓介は返事もせずサインをし、ダンボール箱を受け取る。

運転手はサインを確認し、マニピュレーターを操作してダンボール箱に貼られた受領票を器用に剥ぎ、操縦席に持っていく。

「はい、ありがとうございます。それではまたご利用ください」
運転手がそう言うと、人型トラックはマンシヨンの通路をはしごのように使って降りていった。

イダテンX - 4 (後書き)

イダテンX-4の設定は以下のURLで公開中です。

http://blog.livedoor.jp/tohka
1day1chara/archives/3466299.ht
ml

ワンダラー

ケニスは一瞬ワンダラーにダンジョンの床へと中継器を打ち込ませ、一息吐いた。

「このダンジョンもこれで地下11階？ 深いわね」

「魔物がいない分マシさ。ワンダラーが壊されないし、弾だって節約になる」

ケニスの隣で解析をしているツールが言う。

「ワンダラーが壊れたら回収が大変だし、弾は最近高いし管理で固められすぎてるし。世知辛いよ」

ケニスはツールに頷き、モニタを覗いてワンダラーを歩かせる。ダンジョンをリモコンロボットで探索する、と誰かが言い出したのは100年以上前だ。それから長い年月を掛けて人型ロボットが作られて、こうしてダンジョンを探索している。

以来、冒険者というものが勝手に潜って勝手に命を落とすことが少なくなった。

「しかし、なんで魔術師とか古代の暴君はこんな穴掘ったんだか」と、魔力波と電波を調節して中継器間の通信状態を調べる役割のジェーム。彼の先祖自身もダンジョンを作った魔術師の一人だ。

「ご先祖様の日記には書いてなかったの？」

ケニスがワンダラーを操作しながら聞く。いつもの流れだ。

「書いてあったさ。長年の研究を隠すためだつてね。そんないい研究なら好評すればいいのに、余計なことをするおっさんだよ」

分かっているのに疑問に思う。興味が無いのに聞く。ダンジョンという謎に満ちている空間を、完全な機械的作業で探索する彼ら特有の癖だ。わかりきっていることを聞き、何回も言った答えを出す。「っと、妙なオブジェ発見。これなんだろう」

機械的で、単調で、時々楽しい。これが彼らの仕事である。

ワンダラー（後書き）

ワンダラーの設定 ←

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1daycharacterarchives/4195868.ht  
ml
```

ビーティライ00

ジョナサン・マツカゼはマシンモジュールをデッキのスペースに据えると、デッキの固定フレームにアクセスして彼が乗るビーティライ00を固定した。

ジョナサンは背中の中のハッチを開けて固定フレームのタラップに降り立った。女性技術者から投げられたドリンクパックを受け取る。

「お疲れ様。どう、ビーティライ00は？」

女性技術者、エリス・ゴルドロックが端末のメモソフトを呼び出しながらジョナサンに聞いた。ジョナサンはドリンクの口を開け、飛び出たストローを加えて一口吸い、答える。

「いい機体だよ。変な癖も無い。こっちの要求には素直なレスポンス。思った通りに、とまでは行かないが、大体イメージ通りに動くところで上手いなこれ」

「新製品のグレネードコーラですって」

最後の質問にだけ、端末に入力しながらエリスは答える。

ジョナサン・マツカゼはテストパイロットだ。ビーティライ00の、ではない。彼が所属するボーダーリンボ社のテストパイロットだ。

「じゃあ、ウチの会社の製品は使えるの？」

「過不足無く。大抵の武装はこいつを使えば使いこなせる、と思う」マシンモジュールの性能は千差万別。武装も千差万別。だが、故に武装が必要とするスペックをマシンモジュール側が備えていない場合もある。カタログスペックだけじゃ分からない操作感も重要だ。「カタログ通りの普通のマシンモジュールだよコイツは」

ジョナサンは今し方まで乗っていたマシンモジュールを見上げる。「武装のカタログに『ビーティライ00でテストしました』とでも書いて記事を書けば、どんなマシンモジュールでも操作感を想像できる。それぐらい、ビーティライ00には癖が無い。使用した感想

がそのまま別のマシンモジュールでも通用するくらい」

エリスは端末に入力する速度を速めた。後で使用データも吸い出すのに、ジョナサンは自分の感想は必要無いだろうと冷めた目で見

る。

「そう。参考になったわ」

エリスは端末の蓋を閉じてジョナサンに微笑んだ。

「多分、これから何度も乗って貰うわ。ウチの商品のテストにね」

ジョナサンはため息を一つ吐いて、唇の端を歪め答えた。

「あいよ」

ピーティライ00（後書き）

ピーティライ00の設定

http://blog.livedoor.jp/tohka
1daycharacter/archives/3466263.ht
ml

惑星ドラランカップル衛星軌道上人型機動ステーション アダム

『右足爪先港への入港を許可します。ようこそドラランカップルへ、ようこそアダムへ。我々はあなたたちの入港を歓迎します』

アナウンスが艦橋に流れる。輸送艦ラロト艦長、シロー・カタヤマは安堵のため息を吐いた。

「やれやれ、これで一息付ける」

艦橋の窓から見えるのは巨大な人型建造物、の脚の部分。余りにも巨大すぎて、入港を控えた艦からでは全体が見えないのだ。

工業を主産業とする開拓されて年の浅い惑星であるドラランカップルは、工業以外の収入に乏しい。そして自治政府首脳が出した答えがこの機動ステーションアダムだった。

高い技術力や独特の突飛なセンスにより建造され、今では観光資源にもなっている。

「今回は海賊もでませんでしたね、艦長」

「ああ、そうだな」

そもそも、惑星間での輸送はとてもニツチだ。通常は惑星内で完結した環境であることが多いのに、食料や製品の輸送という仕事が存在する理由はない。大手がやるような仕事ではないのだ。

だからこそ個人が惑星を廻り、行く先々で輸送を請け負う、なんて稼ぎの少ないビジネスも成立するようになってしまった。

「きな臭いな」

「何か言いましたか艦長？」

「いや」

シロー・カタヤマは今回の仕事に疑問を感じていた。依頼されたものがデータディスク一枚。銀河の端から端までの輸送である。ネットで送れば一瞬であるのに、わざわざ高い金を払って託す。

「妖しい、が。日々の暮らしのため、か」

『輸送艦ラロト、右足爪先港小指ゲートから入港してください』

通信からアナウンスがかかる。シローは操舵士に命じて入港を促す。

脚でわざわざ届けて欲しいという依頼の意図が分からない。シローは仕事だから仕方ない、と割り切ることにし、これからこのアダムの依頼が早く終わってくれるように願った。

惑星ドラncカップル衛星軌道上人型機動ステーション アダム（後書き）

惑星ドラncカップル衛星軌道上人型機動ステーション アダムの設定
http://blog.livedoor.jp/tohka
1day1chara/archives/4995682.html

AKATUKI五型

「たいようがーあついー」

半人型トラクターAKATUKI五型の操縦席から空を見上げる。
「安物とはいえ、耐環境スーツ着ててよかったー。それでもあついー」

スーツに付いた換気ファンがフル回転をする。人が生きて行くには辛い環境だが、農業には最適なのだ。金色の稲穂が上から垂れ下がる。下は宇宙タニシが触手をだして、時折やつてくる宇宙ユスリカを捕らえようとしている。その触手にタニシ対策に飼っていた宇宙ピラニアが噛みついた。平和な光景である。

シリウス稲の収穫にはまだ早い。AKATUKI五型でシリウス稲用水田をゆつくりと廻る。今のAKATUKI五型の下半身は船のようになっていて、水田をスマートに航行することが出来る。

育てて一月たったシリウス稲の金色は目に優しい。3時間も経てばサングラスが必要になるくらい金色が鮮やかになるだろうと、農家は思った。その時も耐環境スーツが自動設定で調節してくれるだろうが、なにぶん安物で、いつ壊れるか分からないのだ。用心しておくに超したことはない。

「ま、なんとかなるかー」

なんだか楽しくなり、農家は歌い出した。

「おれはーのうかー、人型トラクターの操縦者ー」

彼一人で一千万人もの腹を満たしている。それほど、シリウス稲は巨大で栄養価が高い。シリウス稲だけでなく、シリウス小麦やシリウス芋もだ。彼は多くの人を生かす自分の仕事に誇りを持っている。

「お」

彼はAKATUKI五型の腕を上げ、垂れ下がる稲穂をAKATUKI五型の手に取りさせた。稲穂に付いた米一粒はバレーボールほ

どの大きさだ。

彼が注目したのは稲穂根元だった。なにやら黒い斑点のようなものが付いている。

「これは……シリウス病か。縁起がいい」

シリウス病とはシリウス系農作物特有の病気で、特定の細菌に感染することで農作物の栄養価が高くなり、味も良くなるのだ。細菌の繁殖にまだ成功せず、偶然に頼るしかない宇宙の神秘である。罹っているかどうかは黒い斑点の形が狼のようだったらシリウス病だ。

「あしたはーしゅうかくーたのしいなー」

農家は歌い出し、強くなる日差しに備えて家に帰ることにした。

AKATUKI五型（後書き）

AKATUKI五型の設定

http://blog.livedoor.jp/tohka
1daycharacter/archives/3466353.ht
ml

エデンガード

砂嵐が止む。

凧いだ大気は熱く乾いている。

其れは人類に残された最後の地であるエデンを背に、砂にくすんだ巨軀を誇る。

「エデンガード」

誰かが囁いた。

「俺が死ぬまで、いや死んでからもずっと、ずっと持ってくれ」
叶わぬ願いと知りながらも、少年は言わずにいられない。

「頼むから」

絶望に染まった声は弱々しい。それでも、願わずにいられない。
軋むギア。カメラに傷が付いたのか、映像も不鮮明。満足に動けないが、戦わねばならない。

地平線の向こうで、砂が轟音と共に巻き上がる。敵だ。前へ、進んで戦わねばならない。

彼は自分に託された愛機を前へと進ませる。何年も何代も、勝ち続けて自分に託された。だから、自分も勝ち続ける義務がある。護るために。

敵は獣のような、蟲のような化け物で、襲ってくる。理由は分からない。無抵抗で殺されるわけにはいかない。今まで伝えてきた者達を、後で震える人々を、裏切るわけにはいかない。

だから、彼はボロボロの巨人を立ち上がらせる。戦うために。

砂塵が舞った。マントが風に震え、擦り切れた端が更に解れる。
砂にくすんだ白い装甲も、軋む関節も、全て受け継がれた誇り。

エデンガード（後書き）

エデンガードの設定

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1daycharacterarchives/5006449.ht  
ml
```

ラーマサカド

東京の街に破壊ロボ現る！

「ひゃーひゃひゃひゃひゃー！ ボクチン様のウルトラハイパーD
Xデンジャラス破壊ロボ28号は無敵だもんねー！」

などと宣いながらドラム缶のお化けみたいな体を揺すり、扁平な
金属に細長い棒をくつつけただけのような脚を何本もがっしやがっ
しやと動かしながら街の建物を踏みつぶして歩く。その姿はまさに
破壊缶。

「むあていッ！」

とそこに天から声。

「む！ 何やつッ！」

律儀に答えるドラム缶。

「日本の民は我が臣民にして神民なり！ これ以上我が民に対する
狼藉は許さんッ！」

声の主は東京タワーのビルの上に立っていた。黄金の肌にハヤブ
サの顔、身に纏うは襷の付いた白い麻製の腰布に、青色の美しい豪
奢な前垂れ。まさにフアラオ！

「来たれ我が軀！」

その金色の隼頭の男はジャンプすると、空を飛んできた巨大なロ
ボットの胸に格納された。ロボットはその男をそのまま巨大化させ
たような見た目だった。

「我は太陽神ラーにして」

爪先から頭の天辺へと、光が凝固していき具足となっていく。太
陽を象った兜飾りが神々しい。

「神となりし新皇であるぞ！」

右手に光を集め、凝縮させる。出来たのは反りを持った日本刀。

目の周りを青く化粧した隼頭の平将門、即ち――

「ラーマサカド、ここに見参！」

刀の切っ先を呆然とするドラム缶に向け宣言した。
「成敗する！」

ラーマサカド（後書き）

ラーマサカドの設定

http://blog.livedoor.jp/tohka
1day1chara/archives/4899705.ht
ml

このページの二つ目の設定です。

カラミティシング

「これでッ」

ピッケメルクーリオが敵の背後に回り込んで剣を突き立てる。赤いカラーリングのNPC機は機能を停止させる。常ならばこれで勝敗は決まるはずだった。

「あれ？」

飛矢剣介はいつもと違うことに気付いた。とつくに画面に「YOU WIN」と表示されてなければいけないはずなのだ。だが、表示されない。

ふいに、赤い回転灯が回りだし、画面に「WARNING」という文字が点滅表示された。

「まさか……」

ボックスボットにはトレーニングモードにのみ乱入してくる謎のボックスボットが噂されている。共通するのは人型で黒いカラーリングというだけだが、例外なく強い。剣介はそんな噂を思い出した。

リーダー画面の下の端に光点。剣介はピッケメルクーリオを旋回させ、視認した。

「やっぱり……」

崖の上に立つ、黒いボックスボット。細身のシルエットに、釣り合わない威力を想像させる右肩のキャノン砲。手に持つのは細長い実体剣。立ち姿は威圧的で、周囲に陽炎を発している。

剣介は思い出した。友人に聞いた噂の名を。

カラミティシング。その災厄の名である。

カラミティシング（後書き）

カラミティシングの設定

http://blog.livedoor.jp/tohka
1daycharacter/archives/5013725.ht
ml

メガニュートン

コロニーが引かれている。引くのは巨大な人型ロボットだ。抵抗しようとするコロニー側の機動兵器や戦闘艇にむけ、全身の火器を向けて破壊の嵐を振りまいている。

一時間前のこと。

遠くのコロニーからやってきたロボットが、いきなり1コロニーにアンカーを打ち込んだ。そしてそのまま、ブースターを点火して牽引し始めたのだ。

コロニーにはブースターなどは付いていない。だから、抵抗も出ずに引かれていくしか無い。

コロニーから脱出する人もいる。コロニーの中は大混乱で、我先に逃げ出そうとする人で宇宙港はひしめいている。しかし、船が足りない。

ロボットは抵抗しようとする人たちを攻撃し、逃げようとする船には手を出さなかった。それが、混乱に拍車を掛けたのだ。まだスペースがあるのに、出港する船が後をたたない。脱出艇の数は足りず、シエルターに逃げ込む人もいた。

巨大なコロニーを巨大なロボットが引いていく。抵抗は逃げるこ

としかできなかった。

目的地は地球。

後世の人はそれをどう評価するのだろうか？

虐殺か、大量破壊か、それとも。

それはこれから決まる。

目的地は地球。地球に落とすために、ロボットはコロニーを引いている。

メガニュートン（後書き）

メガニュートンの設定

http://blog.livedoor.jp/tohka
1day1chara/archives/4981719.ht
ml

バスターゲンナイ

東京の街にエレキ獣現る！

エレキ獣とは電気を帯びた異次元生命体である。街を破壊しようとするが大丈夫！ 我らがヒーロー、バスターゲンナイがいるからだ。

プロペラを回して飛んでくるゝバスターゲンナイ飛んでくるゝ

「エレキ獣！ これ以上の破壊は許さない！」

バスターゲンナイはエレキ獣に向け、鞭を振り回し、巻き付けさせる。この鞭はエレキ獣の電気を吸収するぞ！ 電気を吸われたエレキ獣はなすすべもなく弱っていく。

だまってやられるエレキ獣ではない。エレキ獣はバスターゲンナイに向け走り出した。体当たりだ！ ちょっとよるけるが効果はない。バスターゲンナイにエレキ獣の電撃は効かないのだ！ 絶縁性ゲル粘膜が覆っているからである。

エレキ獣はバスターゲンナイを掴もうとするが掴めない！ 抱きついて絞め殺そうとするが絞めることができない。なぜならゲルでぬめって滑るからだ！

バスターゲンナイがエレキ獣を殴る、殴る、殴る！

エレキ獣も負けじと殴る、殴る、殴る！

バスターゲンナイは鞭以外の武器を持っていない。だから殴るしか無いのだ！

殴り殴られ殴り殴られ、原始的なケンカみたいな戦いを続けるエレキ獣とバスターゲンナイ！ 足元では街がどんどん破壊されているぞ！

エレキ獣がよるめけばビルが倒れ、バスターゲンナイが後ずさればドームを踏みつぶす。

迷惑だ！

バスターゲンナイ（後書き）

バスターゲンナイの設定

http://blog.livedoor.jp/tohka
1daycharacter/archives/4959032.ht
ml

キャメルサプライ-

歌が聞こえる……。

やーまをこーえーたにをこえー
ぼくらのむらにーやってきたー

山の深い大陸中央に、一体のロボットが歩いていた。

「おーおー。ふっかいねえ。次から隊列なんだからしっかりルート探さないとな」

操縦席から辺りを見回し、操縦者は独りごちた。

「GPSによるとこの辺らしいけど、お、あったあった」

彼はマップと周囲を見比べて、目標を発見した。つまり、配達先の村である。

「真水と医薬品、あと食料。不便なのに良く住むねえ。ま、これからは届けられるけどな」

山肌や岩の崩れそうにないところを選んで脚をおろし、ゆつくりと進む。事故を起こしたら、背中の荷物が駄目になってしまうのだ。慎重に。

村から十分近くに来たとき、彼は拡声器のスイッチを入れた。

「お届け物です」

キヤメルサプライ - (後書き)

キヤメルサプライの設定

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1daycharacter/archives/5020556.ht  
ml
```

テグジュペリオン

テグジュペリオンはとびました
りょう手をひろげ、そらたかく

テグジュペリオンはロボットです

えらくてかしこい人に作られました

でもテグジュペリオンはなぜじぶんがとべるかわかりません
よそらをテグジュペリオンのかおがてらします

テグジュペリオンのかおは光るのです

ぴかぴか光ってよそらをてらすのです

でも、なぜ？ときかれると、テグジュペリオンはこまりました

なぜ光るの？

なぜおそらをとぶの？

テグジュペリオンはこたえられませんでした

でも、それでもテグジュペリオンはそらをとびます

おそらをとぶのが好きなのです

だから、きょうもパイロットさんといっしょにおそらをとびます

テグジュペリオン（後書き）

テグジュペリオンの設定

http://blog.livedoor.jp/tohka
1daycharacter/archives/4989370.ht
ml

ジャミングサンドプaster withアイアンロッド（前書き）

アイアンロッドが特殊装備「ジャミングサンドプaster」を使うだけのSSです。

ジャミングサンドブラスター with アイアンロッド

敵のを躲し、アイアンロッドは後に飛び退った。

アイアンロッドは今攻撃してきた敵がスタッフギアだと分かった、腰のランチャーからサンドブラスターを放つ。放たれた砲弾がアイアンロッドと敵の中間で破裂し、前方の敵に向かって重金属製の砂を吹き付ける。

防御力場に細かい波紋がいくつも現れては消え、力場を削る。敵スタッフギアは防御態勢を取って力場を厚くし、整える。

アイアンロッドは相手の動きが止まったことを確認してランチャーから二発目と三発目のサンドブラスターを発射する。空中に細かいアルミ箔が舞い、敵周囲のマナを乱す。マナの供給が止まり敵が展開する防御力場が削れていく。

「こつちも、くらえ！」

アイアンロッドは両腕から風の魔法弾を乱射、力場を削り、四発目のサンドブラスターを発射。吹き付けられた砂は力場を貫き、敵スタッフギアの関節や魔導輪の隙間に入り込む。

「よしっ」

アイアンロッドは背中の中から剣を抜き放ち、両手で持って駆け寄る。

敵は体勢を整えようと機体を動かすが関節に入り込んだ砂が干渉しあってフレームを削る。同時に剥き出しの魔導輪にまわりついた砂に阻害されて回転を止めた。

アイアンロッドは敵の醜態を確認して悠々と剣を振り上げた。

「魔導輪には風の防御ぐらい掛けておけっの」

敵の魔導師はその声を聞きいて2秒後に死亡した。

ジャミングサンドブラスター with アイアンロード（後書き）

ジャミングサンドブラスターは以下のURLで設定を公開中です。

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1day1chara/archives/3741922.ht  
ml
```

使用機体のアイアンロードは以下のURLで設定を公開中です。

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1day1chara/archives/3624801.ht  
ml
```

ハンマーブーメラン with デイザスターマン

『トニー、準備はいーかー？』

ビルの外壁に張り付くデイザスターマンに地上から別のデイザスターマンが呼びかける。

『こちらトニー。準備いいぞ！』

トニーの答えに、下のデイザスターマンは持っていたブーメラン状の鉄塊を振りかぶり、投げた。

回転しながらまっすぐに鉄塊は飛び、トニーのデイザスターマンが自動動作で掴んだ。

『キヤッチ成功！ これより破砕作業に入る』

トニーは操縦桿を握り直し、目の前の壁に下のデイザスターマンから受け取ったブーメラン状の鉄塊―ハンマーブーメランを叩きつけた。一度で無理に壊そうとはしない。万一、外壁が崩れすぎってしまったらデイザスターマンも落ちてしまう。バランスが崩れた状態ではデイザスターマンの滑空は使用が出来ないのだ。

トニーは慎重に、しかし壁が壊せるように力を加えて何度も外壁を叩く。

ハンマーブーメランの尖った箇所が外壁を崩し、そこから更に大きく穴を広げている。

穴が50cm程度になったところでトニーはその穴に向けて呼びかける。

『誰がいるか！？ いるなら返事を！』

三十秒きっかり待って、いないことを確認する。

『じゃあ返すぞ！ いいなー？』

トニーはデイザスターマンを操作し、下のデイザスターマンにハンマーブーメランを投げ返す。

ハンマーブーメランは重さ故に登攀の邪魔になってしまう。だから、投げ合って受け渡しを行う。

『キヤツチ成功！ トニー、次急げ！』

『分かつてるよ！』

操作を誤ってしまったり、プログラムの調子が悪ければ、彼らは簡単に死ぬ場所にいる。

ハンマーブーメランwithデザイナーマン（後書き）

シチュエーションは気にしないでください。

ハンマーブーメランの設定は以下のURLへ

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1day1chara/archives/3789838.ht  
ml
```

デザイナーマンの設定は以下のURLへ

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1day1chara/archives/3653888.ht  
ml
```

ソードフィッシュ with ピッケメルクーリオ

「さて、相手はちょうど格闘型か。いい感じにこいつが試せる」

何もない平地で障害物が何もないのに攻撃をする様子がない対戦相手を見て、剣介は呟いた。

剣介は現在、様々な武装を試している最中であるが、今回メインにテストするのは肩と腰の後ろにそれぞれ二つずつ装備している武装だ。

「射程はどんくらいだっけな」

剣介はピッケメルクーリオの機動性をフルに活かして接近を仕掛ける。相手も剣介に向かって走って近づいてくる。

「……ッ！」

相手の機体は黒く、流線を描くラインがかっこいい……ピッケメルクーリオだった。

「ッ同型!?!」

驚く剣介を他所に相手は背中から剣のようなものを上方へ8本、射出した。剣のようなものは空中を舞うと全てが別々の軌道を描き、全て剣介のピッケメルクーリオを狙う。

「なッ!?!」

見覚えのある武装だ。剣介のピッケメルクーリオの背中にも同じものがある。初撃の八連を避け、急いで相手をロックオンしてソードフィッシュを射出する。

2, 4, 6……7本目と8本目を腰の後ろから射出する寸前に、横に回り込んでホーミングし剣介を狙うソードフィッシュにより2本まとめて串刺しにされる。空中に射出できたソードフィッシュも相手のマシンガンにより2本落とされた。

腰を落として跳躍のようなダッシュをする相手に、剣介は剣を振りかぶり敵を攻撃しようとする。振りかぶった腕を敵の日本刀の形をした刀に斬られ、直後7本のソードフィッシュに後から串刺しに

された。

画面には「YOU LOSE」と表示されている。

「ま、負けた!？」

完敗、である。驚愕により心に隙ができた。そこを突かれたのだ。同じ機体、同じ武装……しかも相手は自分より慣れていた。上手かった。機動も攻撃のタイミングも全て。

だが、

「……わくわくしてきた!」

剣介はへこたれない。分かったことがあるからだ。

「こいつ、すげえ! ソードメクリウス、お前、あんな動きも出来たんだな!」

ピッケメルクーリオ。初心者向け既成モデルでありながら、上級者の操縦にも対応できる傑作機である。

ソードフィッシュwithピッケルクーリオ（後書き）

ソードフィッシュの設定は以下のURLへ

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1day1chara/archives/3700869.ht  
ml
```

ピッケルクーリオの設定は以下のURLへ

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1day1chara/archives/3643918.ht  
ml
```

ショットダスター with エーテル S2

かなりの敵を倒したが、近づかれすぎた。このまま抵抗していたらグレネード弾を撃ち込まれるかも知れない。そう考えたトニーは撃たれた振りをして、気密口の影に身を潜めた。

手の甲につけたショットダスターを確認し、構える。予備の弾は腰にショットダスター用クイックローダーに付けてある。このクイックローダーは押しつけるだけでショットダスターの弾丸を恙なく装填出来る優れものだ。

トニーの作戦は念のためにグレネードを打ち込まれたり、少し慎重になられてもしたら破綻してしまう。賭け、であった。

静かに、何かに触れないように、ひたすら待った。

図書艦を攻めようとする宇宙海賊にとって、予め空いている気密口は確保したいだろう。外側からハッキングを掛けたり爆破するより各段に楽だからだ。

逸る鼓動を抑える。腕は小さく。不用意に入り込んだ阿呆を狙うのだ。

10秒……15秒……銃身の先端が入った。

『食らええ！』

トニーは相手の全身を確認するより速く、ショットダスターを打ち込んだ。フレシエット弾が詰まった四発の散弾が破裂。爆発の勢いそのままに侵入者のAESを貫き宇宙服を通し全身を穴だらけにする。

直後トニーは外の様子を確認もせず爆弾を気密口から外に放り投げる。気密口の影に隠れたまま、1秒を数えて爆破スイッチを押した。

ショットダスター with エーテル S2 (後書き)

ショットダスター

http://blog.livedoor.jp/tohka

1day1chara/archives/3800106.ht

ml

エーテル S2

http://blog.livedoor.jp/tohka

1day1chara/archives/3663160.ht

ml

ブライトネスレーザーwithアイアンロッド

胸にある赤い宝玉の周囲の空間が黒く影に塗りつぶされる。アイアンロッドの胸部装甲に引かれた魔力ラインが鼓動するように微光し、黒い空間に押し込められる。

「初めて使うけど、大丈夫だよな」

現在は黄昏時。アイアンロッドが使おうとする武器にとっては好ましくない時間帯だ。

「光のチャージに時間が掛かるな」

アイアンロッドの魔導師は黒い空間の様子を見て呟く。この空間が、光り輝くまで待たなくてはいけないのだ。

アイアンロッドが見つめる遙か先に砦がある。閉ざされた砦の扉を今から切り裂こうとしている。アイアンロッドの胸にある宝玉は、それが可能なのだ。

力場の維持と光の収集、どちらも魔力を多く消費する。というのに、光の少ない時間帯だ。だが夜が明けるのを待つわけにはいかない。敵の援軍が来るまでに、砦を攻略しなければいけない。

太陽が落ちる直前、アイアンロッドの胸の前にある空間が、弱く輝きを放つ。もう黒い空間があったところ全体が輝いているように見える。チャージ終了の合図だ。

「よし、発射だ！」

アイアンロッドの胸にある宝玉から、光の筋が放たれた。光の筋は砦の鉄扉右上に当たり、鉄を溶かし切りながらゆっくりゆっくりと左下へ向けて進む。

「出力、足りるよな」

半ばまで溶かしきり、光の筋が細く弱くなってくる。

「もってくれ、もってくれよ」

力を抜くわけにはいかない。少しずつ、ゆっくりと。

そして、鉄扉に一本の赤い線が引かれた。光の熱によって赤く溶

けた鉄だ。

「全軍に通達！ 鉄扉をブチ破れ！」

ブライトネスレーザーwithアイアンロード（後書き）

ブライトネスレーザーは以下のURLで設定を公開中です。

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1day1chara/archives/3817076.ht  
ml
```

アイアンロードは以下のURLで設定を公開中です。

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1day1chara/archives/3624801.ht  
ml
```

飛矢剣介は動こうとしない相手を物陰から伺う。

今回の対戦相手は剣介と同じく格闘戦重視らしきボクスボットだが、対戦が始まっていくと、開始地点から動こうとしない。

遮蔽物の多い市街地ステージだが、相手の開始位置は大通りで見つけやすい位置にいた。頭部を動かして周囲を確認するという事もしていないので、あからさまに怪しい。相手が狙撃型だったらどうするつもりなのだろうか。と剣介はビル影から見つめる。しかし、敵は動こうとしない。

剣介は今射撃武器を装備して居らず、持っているのは長い柄の先に刀のようなものが付いているポールウェポンだ。説明書にはヒートグレイブと書いてあった。剣介の友人はヒートグレイブを剣介に渡すときに薙刀と言っていた。薙刀と何枚かの爆裂苦無、それだけだ。

ピッケメルクーリオは拡張性は高いが余り積み過ぎると機動性が落ちてしまう。走り回ってチャンスを探す剣介には重装備は必要無かった。

「埒があかない。仕掛ける」

剣介は右手に握る操縦桿に付いたスティックを親指操作し、トリガーを引く。ピッケメルクーリオが腰から苦無を一本取り出した。トリガーを離せば投げるようにセットしてある。準備は出来た。

剣介は大通りに出て、苦無を敵の頭に投げる。見事頭部に刺さり爆発。予備カメラにモニターが変わるまではパイロット次第。剣介は苦無が敵に刺さると同時に駆け出し、薙刀を両手で持って大上段に構え跳びかかる。

敵の腰に付いている筒から何が出て、ピッケメルクーリオの胸に付く。銃身の長や形からいってグレネードでは無いと気付いていた剣介は、無視して薙刀を振り下ろした。敵は両腕を上に掲げ、薙刀

を防ぐ。右腕は切断され左腕も半ばまで薙刀が食い込む。

剣介が更に力を入れようと操縦桿を前に倒す直前、敵の左肩付け根から小さい爆発音と煙。敵が自ら左腕を切り離したのだ。

左腕が無くなった敵は剣介の目の前で急速ターンで後を向き、そのままブースターや肩や腰の追加ブースターを全壊稼働して大通りを逃げていった。

「な、なんだ？」

あまりの突飛な行動に拍子抜けした剣介は敵の逃走を見逃してしまった。

敵が大通りを曲がり、見なくなつたところで気付く。前から一定のリズムで単純な電子音が鳴っている。ピッケメルクーリオに俯かせ、胸部を確認すると何か小さく点滅するライトが付いた機械が張り付いている。ライトの点滅は電子音と同じリズムであり、機械から機械の長さよりも長いアンテナが伸びている。

「これって」

剣介はピッケメルクーリオの頭を上に向け、上空を見た。強く輝く何かがある。筐体のコックピット内に警告がなり出した。赤い警告灯も回転し始める。

滅びの光が振るまで、あと0.5秒。

衛星砲 サテライトスナイパーブレイカー with 衛星砲友の会代表が駆るボク

衛星砲 サテライトスナイパーブレイカーの設定はこのURLです。

<http://blog.livedoor.jp/tohka1day1chara/archives/3876167.html>

衛星砲友の会代表のボックスボットの設定はありません。

多目的ビームアームwithビーティライ00

微かのオレンジ色の付いた暗所灯の光。ビーティライ00は両腕にテストする武装を一本ずつ持たされていた。

「なんだこのトンファアームみたいなの」

真新しいパイロットスーツのジョナサンはビーティライ00を足元から見上げ、所見を述べる。

「トンファアームというな。形は似てるけど全く違うモノよ」

と端末で機体のチェックをするエリス。

「私の企画よ」

誇らしげに強調し、自慢するような顔で言った。

「正式名称はまだ決まってるけど、仮称は『多目的ビームアーム』」

端末の機体チェックを終了させ、武装のデータを呼び出す。エリスはそれをジョナサンに見せる。

「従来のビームソード、ビームガンは持ちかえが面倒。ビームシールドは装備している機体が少ない。そしてビーム系武器全般に於いて、本体のエネルギーを消費する。そんな欠点を諸々コレ一本で解消できる優れものよ」

自分の企画が通ったのがよほど嬉しいのだろう。エリスは次々と性能を捲し立てる。ジョナサンは途中から聞くのを止めて、事前に渡された資料を読みだした。

手持ちの柄とビーム兵装を三つまとめたマルチビームユニットで構成された武装だ。先端の発射口はビームガンにもビームソードにもなる。柄を握って外側に来る部分はビームを広く展開しシールドになる。トンファアームのように持つ事で取り回しと、ビームユニット大型化を両立。

「いいことばかりが並ぶが」

ジョナサンは目を細め、性能を見極めようとする。

「威力や弱点はどんなのか」

だが所詮は紙上である。ジョナサンは、実際には使ってみないことには分からない、と結論付けた。

「とまあ、我が社の自信作なのよ！」

「ん、終わったか。じゃあ始めるぞ」

「ホントに聞いてたの？」

かなり数の多い的が次々とビームによって破壊されていく。ふいに攻撃もされるがジョナサンはビームアームをシールドモードにして難なく防ぐ。

「使いやすい。あいつの自信にも頷けるな」

ガンとソードの切り替えは素早く、シールドへの切り替えから展開も早い。生身であつたら狙いの付けにくい銃口レイアウトはマシンモジュールでなら関係ない。手首捻りが必要の無いビームソードはただ腕を振るだけでも威力が変わらない。シールドは腕を顔の前に持ってきたときにちょうど顔を防げる位置に展開する。高いレベルで纏まっている、と評価すればいいのだろう。

「何故か釈然としないが、使いやすいことは確かだな」

多目的ビームアームwithビーティライ000（後書き）

多目的ビームアームの設定

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1day1chara/archives/3859973.ht  
ml
```

ビーティライ000の設定

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1day1chara/archives/3466263.ht  
ml
```

サイクロンシューターwithアイアンロッド

アイアンロッドの腕を伸ばす。サイクロンシューターが唸りを上げ、砲口から風が吹き出す。崖の上から海上への砲撃だ。潮風に負けない、強い風を出さなければ行けない。アイアンロッドの魔導師は右手に力を込め、魔力を注いだ。

「砲弾は、鉛製砲丸でいいか」

砲丸が5発詰まったマガジンをサイクロンシューターにセットする。トリガーを引けばマガジンからサイクロンシューターの砲身に落ちた砲丸が風の魔法により発射される。

破壊目標は水平線近くにある商船の側面。サイクロンシューターは元々一般兵士が乗る量産型スタッフギア用の装備だが、魔導師が乗るスタッフギアが使えば、狙撃の真似事もできる。威力だっていくらかでも増やせる。

「穴を空けて、船を動け無くすればいいなんて、楽な仕事」
間を置いて、一発ずつ鉛の砲丸が発射された。

風の魔法によりライフルのような回転が加えられ、高速で撃ち出された砲丸は全て敵国の商船に穴を空けた。

補給や貿易の妨害も、りっぱな任務である。

サイクロンシューターwithアイアンロッド（後書き）

サイクロンシューターの設定

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1day1chara/archives/3718544.ht  
ml
```

アイアンロッドの設定

```
http://blog.livedoor.jp/tohka  
1day1chara/archives/3624801.ht  
ml
```

マジックシェラプネルシェルwithアイアンロッド

サイクロンシューターにマガジンを装填する。特別製の対陣地用魔法弾だ。

山賊相手に些が大仰ではあるが、手加減無用のお達しである。砲口を真上に向け、3発ほど発射した。

「てめえ、どこへ向かって撃ってやがる」

スタッフギアを5台もどうやって手に入れたのだろうか。旧式もいいとこの型であることを見る限り、廃棄寸前のを拝借したか。魔導師でもない者がスタッフギアに乗ったところで、ロクに防御障壁を展開することも出来まい。

上空で爆発音。上面の防御障壁に力を注ぎ、強化する。山賊が掌をこちらに向けているが、何も起こらない。掌を向けるだけで魔法弾が出ると思っていたとしたら、哀れでしかない。

爆発音に遅れること少し。金属製のメダルが落下してきた。そのメダルは地面やスタッフギア、防御障壁に当たる度に爆発を起こし、衝撃を与える。

爆発の雨は6つ数える間続き、辺りを静かにした。山賊達は生身なら肉をさらし、スタッフギアなら半壊した機体の歪みに挟まれて呻いている。

「防御障壁を貼ったスタッフギアには効かないのは分かっているが、心臓には優しくないな」

マジックシエラプネルシエルwithアイアンロード（後書き）

マジックシエラプネルはサイクロンシューターでなくとも、遠くに飛ばせるなら大砲でも手投げでも構わない。

マジックシエラプネルシエルの設定

<http://blog.livedoor.jp/tohka1day1chara/archives/3897864.html>

アイアンロードの設定

<http://blog.livedoor.jp/tohka1day1chara/archives/3624801.html>

重量級のグレートエスペランサーがブーメランを投げる。同時に重量級のジャイアントグレイブが胸から熱線を放った。グレートエスペランサーは熱線を紙一重で避け、ジャイアントグレイブは熱線を放つため動きを止めていたため、ブーメランの直撃を受けた。

瞬間、グレートエスペランサーが金色に輝き、空が黒い雲に覆われる。雲は渦を巻き、稲妻を帯びるが、渦の中心から金色の光が放たれる。その光はグレートエスペランサーの前に突き刺さった。光が刺さったところから剣の柄のようなモノが突き出てる。

「雷雲剣！」

グレートエスペランサーのパイロットが、地面に刺さった柄を握りながら叫ぶ。彼が引き抜いたそれは、鈍色の大剣であった。彼は大剣を片手で天に向けると、剣に雷が落ちた。すると剣が金色に輝き、オーラのようなモノが立ち上る。

「必殺！」

大剣を振り下ろすと金色の光弾が発射された。光弾はジャイアントグレイブにあたり、十字の光になりジャイアントグレイブは宙に固定された。

「雷雲剣クロスブレイズスラッシュ！」

グレートエスペランサーは大剣を両手で握り直し、振りかぶり、ジャイアントグレイブに駆け寄って大上段から振り下ろした。斬った痕は金色の光が波のように鳴動している。

「サンダーファイナリティ！」

グレートエスペランサーが踵を返し、ジャイアントグレイブに背を向ける。

「ぐわー」

ジャイアントグレイブから光の帯が何本も放射され、爆散した。

「どうよ俺の設定！」

「流石だねー。よく研究してる。見栄の切り方も演出の長さもちょうどいいくらい」

必殺技愛好会。ボクスボットの「超 必殺技」シリーズを愛好する団体である。

超 必殺技シリーズ第4弾 特攻斬撃型ハイパースラッシュウィットロボットオ

グレートエスぺランサーもジャイアントグレイブも設定は用意されていません。

超 必殺技シリーズ第4弾 特攻斬撃型ハイパースラッシュウィットロボットオタクのボックスボットの設定

<http://blog.livedoor.jp/tohka1day1chara/archives/3752617.html>

シュトルマス（前書き）

状況はわかりません。
ただ書きたかっただけ

シュトルマス

山の中腹に2機のマジックギアが立ち、今まさに戦場になろうとしている平原を見つめていた。

「随伴機は狙撃を警戒。コックピット、解放するぞ」

二機のうち、盾を持たない黒い機体が胸部ハッチを開いた。胸部装甲が上に少しだけずれ、覆われていた下部分が下に開く。上にハネ上がるように1枚目のハッチが開き、観音開きに2枚目ハッチが開いて更に倒れるように3枚目ハッチが開いた。装甲と3重のハッチにより厳重に守られたそこはコックピットだ。マジックギアの動力を供給する魔術師が座す場所。

コックピットに吹き込んだ風で頭の両側にまとめた金髪を揺らすのはエステマリア。黒いマジックギア、シュトルマスのサブパイロットで、魔力の供給と魔術の行使を担当する。

「リード、弾を」

エステマリアがさういうと、シュトルマスは左腰腰に付けたポーチから子供と同じぐらいの大きさはある弾を取りだし、コックピットの前に雷管を向け、胸の位置まで持つてくる。エステマリアはシートから立ち上がり、巨大な弾の前まで歩いて降りてくる。右手で長い金髪を肩の後に払い、その手で雷管に手を触れる。

「術式は？」

エステマリアが効く。

「指示では凍結術式で着弾点より地面を伝わって広がるアイスフィールド」

メインパイロットのリードが答えたノ命令書に目を通しながらも退屈そうな顔／。

「そう。でもつまらないわね。着弾地点から半径2？の窒素の一部を可燃性ガスに錬成、しかる後に発火する術式を組み合わせない？」

エステマリアは雷管に手を触れたまま、肩越しに後を見る。

「味方を巻き込むなよ」

リードは彼女を止められるとは思っていない。ならば、提案を受け入れ注意を促せば良い。彼女はそれほどまでに、「切り札」なのだから。

「了解。弾は勿論強装弾よね？」

エステマリアが腕に魔力をこめると、自然と魔力が弾に注ぎ込まれていく。弾丸の莖莖に銀色に光る文様／弾頭に赤銀に光る文様／が刻まれた。

「出来たわ」

エステマリアは作業が終わるとコックピットに登り、シートに座る。弾への魔術付与は終わりだ。コックピットハッチが内側から順番に閉まり、胸部装甲ががっちりとはみ合う。

リードはノ右レバーを小刻みに動かし、レバー上にある2つのボタンを押すノシュトルマスの右腕を操作し、右手のハンドキャノンのバレルを追って薬室を露出させる。今し方魔術を付与した弾丸を薬室に装填、バレルを元の位置に戻した。

「射撃姿勢」

リードが宣言する。

随伴機、銀色の盾を持った機体、ダルクロードがシュトルマスの左斜め前に膝を突き、右腕をまっすぐ横に伸ばす。

シュトルマスは腰を落とし、左腕の拳を握り手首を曲げ、ダルクロードの腕に置いた。そして、ハンドキャノンを手首の上に添える。二つある頭部カメラアイのうち左側に保護シャッターを下ろす。

「アンカーはいいの？」

エステマリアが聞いた。

「頼む」

対してリードは短く答える。

シュトルマスのスカートアーマー先端から青い光が放出され、地面に突き刺さる。

「サークル展開」

エステマリアの宣言とともにシュトルマスの背後に大きな魔法陣が一つ／ハンドキャノンの銃口の前に何枚もの小さな魔法陣が／展開された。

「完了。術式完成。いつでも撃てるわ」

銃口の前にある魔法陣が回転を始める。

「――ファイア」

リードの吹き。

ハンマーが雷管を叩く。

雷管から光が翼のように溢れ／銃口から光の線が飛び出した。巨大すぎる音が林立する木々を揺らし、音の壁がシュトルマスを中心に円状に大地を叩いた。

光の線はまっすぐ敵陣中央に突き刺さる。後から音に叩かれたダルクロードが前に倒れる。

遅れて遠くの山に反射した発射音が山彦として返ってくる。

そして、光の線が突き刺さった箇所にも光が集まり、爆散した。

シュトルマス（後書き）

ハンドキャノンとはトンプソンコンテNDERっぽい奴です。
っていうかそのものをロボットサイズにしたものです。

いいんだよかったいいんだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9612w/>

ロボットコレクションSS（練習）

2012年1月7日02時45分発行